

子どもが学びを深める社会科授業づくり

和歌山大学教育学部附属小学校 西川恭矢

和歌山大学教育学部 内田みどり、小関彩子、○岩野清美

0. はじめに

今年度の附属小学校との共同研究は、「子どもが学びを深める社会科授業づくり」をテーマに行った。以下、2022年11月5日(土)に行われた研究授業を事例に、1. 授業の概要、2. 授業における子どもの学び、3. 子どもが学びを深める社会科授業の要件について探っていく。

1. 授業の概要

(1) 授業の計画

① 本時にいたるまでの学び

本単元は、小学校5年生工業単元である。身近な工業である繊維工業を事例に、大企業であるユニクロと和歌山市で吊り編み機による製造を行っている和田メリヤスを取り上げ、探究していく。高度経済成長期に生産効率が高いシンカー機による製造に転換した工場が多いなか、和田メリヤスは品質の高い吊り編み機による製造にこだわってきた。現在、国内で吊り編み機を使った製造を行っているのは和田メリヤスだけとなっている。子どもたちは前時まで「高度経済成長期にシ

ンカー機を見た和田さんが『吊り編み機でやっていける』と思ったのはなぜだろう？」をテーマに探究し、和田メリヤスが品質にこだわった製造を行っていることをつかんでいる。

② 本時のテーマ

本時のテーマを「吊り編み機での製品づくりにこだわる和田さんの決断は正しいと言えるか？」とし、安い商品を求める自分たちにひきつけて工業生産について考えることを通して、消費者の選択が将来の社会をつくっていくことに気づかせるとともに、個々の企業がそれぞれの戦略を採ることによって消費者の多様なニーズに応えていることに気づかせることをねらいとした。

(2) 授業の実際

授業の概要を表1に示す。なお、紙幅の都合上、児童・教師の発言とも、「2. 授業における子どもの学び」での考察対象とするものだけを要約して取り上げている。

表1 授業概要

T1 前回の授業で、和田さんが吊り編み機にこだわる理由を考えたけど、「めっちゃわかる」という子と「全然わからん」という子がいた。今回も、このことについて、話し合いたい。前回の授業で、先生がみんなに出さなかった情報がある。実は、最近、和田さんは吊り編み機の針を5000万円分買った。…ということは、和田さんには、お金があるし、これから吊り編みを続けるつもりでいる。 板書：これからも吊り編み機を使い続けるという和田さんの決断は正しいと言えるのか。	(黒板に貼られた Yes-No に子どもたちが自分のネームカードを貼る) (どちらから発表する？という声を受け、少数派から、悩んでいる人から、という意見がそれぞれ出され、A児が口火を切る。) C1 A児 シンカー機の方がメリットが多い。吊り編み機は習得するまでに10年かかって、若い人が覚えるのは大変。誰かが教えないといけないし、教える人もその間は生産に携わることができない。 (Yes側の意見を言うか、No側の意見を言う
---	--

かという声上がり、No の意見を続けることになる)

(中略)

C2 B児 付け加えて、10 年間もかかるから、Yes よりの No。でも伝統を守るために吊り編み機を使い続けている。

T2 昨日から意見を動かした人？(Yes 側に名前を貼っている子が発表する)

C3 C児 和田さんは、吊り編み機はまだいろんなやり方(編み方の工夫の余地)があると言っていた。ただ、吊り編み機は大量生産できないけど、ユニクロは生産量がある。

C4 D児 吊り編み機のメリットは丈夫なこと。でも、みんな和田メリヤスの服は着ていない。自分は、シンカー機の服を品質が悪いとは思わない。

C5 E児 吊り編み機を使い続けるのは、だめって言えやん。何年も何年も頑張っているし、世界から認められている。私たちにとって正しくないけど、和田さんから見たら正しい。

T3 和田さんは、本当はシンカー機を使いたいと思っているということ？

C6 F児 もっと効率よくしたいと思っている。

C7 C児 もし、もうけだったら、吊り編み機のもうけは少ない。こんなに続くわけではないと思った。

C8 D児 吊り編み機を使っているのは和田メリヤスだけ。ほんとは変えたいけど、しゃあなしに使っている。

C9 E児 和田さんは、周りのことは気にしない。高度経済成長期に他の会社から変わっているといわれても、吊り編み機を使い続けた。周りのことは気にしていない。

C10 B児 吊り編み機はスイスからもらったと言っていた。スイスに思い入れがあるから大切にしているのかも。

C11 G児 周りが何を思っても、和田さんには信念があった。

C12(つぶやき) なんのために使ってる？

T4 和田さんは、5000 万円をどうやって手に入れたん？ 針は 300 円なので、350 万円。5000 万円あったら、シンカー機が買える。

C13 D児 和田さんは、グッドデザイン賞をもらっていた。

C14 B児 グッドデザイン賞をすごい人に買ってもらって…

C15 E児(つぶやき) 妄想でしかない。

C16 C児 無理矢理吊り編み機を使っているのだったら、5000 万円も使わない。

T5 和田さんは、どんな思いで吊り編み機を吊り編み機を使い続けているのだろうか？

C17(つぶやき) お金めあてではない。

T6 (インタビューに行ったとき、)和田さん、めっちゃお金もうけのこと考えてたで。お金を稼がないと、工業として成り立たない。和田さんはどうやってもうけているのだろうか？

C18 A児 和田メリヤスの商品は、高いけれど品質がいい。丈夫。高くても買ってくれる。

C19 H児 5000 万円あったら、他の方に使った方がもうかるかも。でも、利益がなくなるかも。

C20 B児 私なら、値下げする。

C21 H児 和田メリヤスは、藍染めしているから高い。値下げしたら、利益が出なくなる。

C22 C児 オーガニックコットンを使っているから、値段は当たり前だと、(家庭科の)今村先生が言っていた。

C23 B児 糸 1 個 30 万円するって言っていた。

C24 E児 みんなと同じことしてたら埋もれていく。ユニクロには勝てない。中小企業は、みんなと違うことをした方が、まだちょっと売り上げも上がるだろう。

T25 今、E児さんが言ったのはどういうこと？

C26 F児 ユニクロの方がいっぱいつくることができる。和田メリヤスが同じことをしても、

売れなければ無駄になる。ユニクロには勝てるわけがないので、別の土俵で勝負する。

C27 B児 E児ちゃんの意見を聞いて、(ホワイトボードに図を書きながら) B児がまねをし

ても、ユニクロと同じところにしかならない。ユニクロの真似をしてしまうと、もともとうまくしているユニクロには勝てない。なので、別のでっかい力を手に入れたら、もっと上に行けるかもしれない。

2. 授業における子どもの学び

(1) 問いの成立をめぐる

① 学習対象に対するエンパシーをもつての探究

本時では、教師から大きく 3 つの問いが出された。まず、授業のはじめには、「これからも吊り編み機を使い続けるという和田さんの決断は正しいと言えるのか」(T1)という問いが提示されている。これは、和田メリヤスが品質にこだわって生産しているという前時までの学習を踏まえ、労働者不足(後継者問題)や環境問題などの今日的課題のなかで改めて工業生産について捉え返すとともに、私たち消費者の選択が将来の社会をつくっていくことに気づかせるための問いとして設定された。この問いを探究していくためには、前提として、高度経済成長期に吊り編み機を使い続けるという決断をした和田さんに対するエンパシー(ある人の置かれている社会的状況を理解し、その状況に置かれた人の決断についての共感的理解)が成立している必要がある。

しかし、E児がC5でいみじくも「(和田さんは)世界から認められている。私たちにとって正しくないけど…」と発言したように、子どもたちは、品質にこだわるという和田さんの規準で今日の社会や自分を振り返るのではなく、自分の規準(技術習得にかかる時間、生産量、「自分はシンカー機の服

の品質が悪いとは思わない)で和田さんを評価している(表 2)。

教師もこの状況を見取り、「和田さんは、本当はシンカー機を使いたいと思っているということ？」(T3)という追発問をし、「無理矢理吊り編み機を使っているのだったら、5000 万円も使わない」(C16)の発言で、「和田さんは、これからも吊り編み機を続けるつもりでいる」という T1 の発言が子どもたちに落ちた状態となった。

注目されるのは、「吊り編み機のもうけは少ない」→「(もうけがめあてであれば)こんなに続くわけはない」(だから和田さんは伝統のために吊り網を使い続けている?) (C7)、「吊り編み機を使っているのは和田メリヤスだけ→しゃあなしに使っている」(C8)という発言が和田さんを理解可能な他者とみなしているのに対し、「なんのために使っている?」という問いを改めて生起させた、「和田さんは、周りのことは気にしない」(C9)という発言は、和田さんを自分たちとは異なる存在として位置づけていることである。(C9を発言したE児は、C5でも「私たちにとって正しくないけど、和田さんから見たら正しい」と発言し、和田さんがみている世界と自分たちがみている世界が異なることを指摘している)。

私たちは、得てして、子どもたちに「根拠をもって発言しなさい」と指導する。その意味では、C7、

表 2 「和田さんの決断は正しいと言えるのか?」という問いに対する探究の対象と判断基準

	探究の対象	判断の規準
教師が期待する探究	今日の社会 自分	和田さんの規準 (品質にこだわった生産)
子どもの探究	和田メリヤス	自分の規準(技術習得にかかる時間、生産量、自分なりの品質に対する考え方)

C8の発言をした子どもたちも、「吊り編み機のもうけは少ない」、「吊り編み機を使っているのは和田メリヤスだけ」という事実に基づいて発言している。しかし、このことが必ずしも、対象に対してエンパシーをともなった探究になっているわけではない。このことについて、項を改めて検討したい。

② 科学的概念の使用

吊り編み機を使用した綿布の製造について、子どもたちは、「もっと効率よくしたい」(C6)、「もうけは少ない」(C7)と述べている。確かに子どもたちが調べた資料にも、吊り編み機に比べたシンカー機の従業員1人あたりの生産量は5倍、機械あたりの生産量は20倍とある。しかし、「生産量」と「もうけ(利潤)」は別の概念である。実は、T6「和田さんはどうやってもうけているのだろう?」という発問のあと、教室の後ろに立っていた筆者(岩野)は、I児に「先生はどう思う?」と発言を求められ、(I児に、先生の意見を聞かせてほしいと言われたのは、この日3回目だったこともあり)「みんながシンカー機を使って大量生産しても、これから日本では人口が減少していき、お客さんも減っていくから、買ってくれる人がいるのかなと心配している」と答えている。I児の隣の席のF児もこの発言を聞いており、「吊り編み機にこだわった生産」について「効率をよくしたいと思っている」(C6)から、「消費者が減少していくなかで和田メリヤスが生き残っていくための戦略」として捉え返している。①で検討したエンパシーをともなった探究のために、科学的概念(この場合は「もうけ」)を用いて社会的事象を捉えていくことの必要性が示唆されていると言えよう。

(2) 科学的理解と物語的理解—物語的理解の妥当性を高めていくために—

和田メリヤスの戦略をめぐって、授業終わりに「差別化」(という言葉は使っていないが)という視点から説明したF児、B児の2人の理解の仕方は、非常に対照的である。

F児は、本単元のなかで一貫して利潤にこだわ

って探究してきており、その学びの様子を前項でも紹介した。ここでは、B児の学びに焦点を当てて検討したい。

「修行には10年かかる。でも、伝統を守るため」(C2)、「スイスからもらった機械だから大切にしている」(C10)、「グッドデザイン賞をすごい人に買ってもらう」(C14)といった発言からは、人の気持ちを大切にし、いわば物語世界を生きるB児の社会認識が垣間見える。それはときにクラスメートからも「妄想でしかない」(C15)と言われる。また、「私なら、値下げする」(C20)という発言は、「藍染めしているから高い。値下げしたら、利益が出なくなる」(C21)、「オーガニックコットンを使っているから、値段は当たり前」(C22)などの事実によって否定されたりもするが、このときには、「糸1個30万円するって言っていた」(C23)という事実を持ち出し、自らの意見をためらいなく修正している。

先に筆者は、B児の社会的事象についての理解を「物語的」と述べたが、その感を強くするのがC27である。ここでは、和田メリヤスの技術を「別のでっかい力」と表現し、その結果を「もっと上に行けるかも」と述べている。いわゆるなろう系小説では登場人物の「ステータス」を「数値化」して表現することが少なくないが、B児はまさに、そのような社会認識の方法を現実世界に持ち込んでいると言えよう。

このようなB児が、授業のなかで自らの意見をためらいなく修正し、「伝統を守るため」(C2)という認識を「ユニクロの真似をしてしまうと…勝てない。…別のでっかい力を手に入れ…」(C27)と作り変えていけたのはなぜか。端的に述べるならば、「友達の発言をよく聞いているから」ということになろう。B児の発言からは、周りの人の気持ちを大切に考える考え方が垣間見える。それはB児自身にも当てはまり、和田メリヤスの製品の価格は品質に見合っているという友達の発言のあとに、糸の価格を持ち出すなど、事実でその発言を補強しようとしている。友だちの意見をよく聞き、自分の意見の修正すべきところはためらわずに作り変

えていけること、このことが社会的事象に対する物語的理解の妥当性を高めていくことにつながることを示唆されている。

3. 子どもが学びを深める社会科授業の要件

本時は「和田さんはどうやってもうけているのだろうか？」(T6)という問いに対して一定の解を導くところで終了している。本節では、E児の学びを取り上げながら、「子どもが学びを深める」とはどういうことか、また、それがどのようにして行われるのかを検討したい。

E児は、「吊り編み機を使い続けるのは…世界から認められている。私たちにとって正しくないけど、和田さんから見たら正しい」(C5)、「和田さんは、周りのことは気にしない。高度経済成長期に他の会社から変わっているといわれても、吊り編み機を使い続けた」(C9)と述べ、和田さんの品質へのこだわり、授業の初めから言及している。しかし、この「品質へのこだわり」が「他企業との差別化」として捉え返すきっかけとなったのが、「和田さんはどうやってもうけているのだろうか？」(T6)という問いである。この問いに対し、E児は「みんなと同じことしていたら埋もれていく」(C24)と述べ、世界から認められているという認識が差別化として立ち上がっている。このような、既知していることに別の意味を見いだすことを、本稿では「学びが深まる」とみなし、それを可能とする要件として、(1)前提となる対立構造の否定、(2)クラスメートや教師による発言のサポートの2点を指摘したい。

(1) 前提となる対立構造の否定

E児は、前時の終わりに、「和田さんが吊り編み機を使い続けるのは品質にこだわっているから」であることを資料から見だし、本時でも、「吊り編み機を使い続けるのは…和田さんから見たら正しい」(C5)ことを指摘している。しかし、もう一方すすんで、「なぜ、品質にこだわっているのか」

を問い返すところまではいっておらず、「大量生産＝もうけ vs 高品質」という二項対立のもとで和田メリヤスを捉えているように見える。そのE児の認識を動かしたのが、「和田さん、めっちゃお金もうけのこと考えてたで。お金を稼がないと、工業として成り立たない。和田さんはどうやってもうけているのだろうか？」(T16)の発問であろう。この発問によってユニクロと和田メリヤスを同じ「繊維工業」という土俵で捉える見方がE児のなかに生じ、それが、和田メリヤスについて「みんなと違うことをする」という表現につながっていると考えられる。

(2) クラスメートや教師による発言のサポート

それでは、このようなE児の学びはどのようにして成立しているのか。ここで1つ指摘したいのは、授業を動かす大きな契機となるE児の発言には、それに対するサポートが行われていることである。具体的には、「和田さんは、周りのことは気にしない。高度経済成長期に他の会社から変わっているといわれても、吊り編み機を使い続けた」(C9)という発言は「周りが何を思っても、和田さんには信念があった」(C11)というG児の発言、「みんなと同じことしていたら埋もれていく。ユニクロには勝てない。中小企業は、みんなと違うことをした方が、まだちょっと売り上げも上がるだろう」(C24)という発言は「今、E児さんが言ったのはどういうこと？」(T25)という発言によって、E児の発言の意図するところをクラスメートが共有する機会が設けられている。

このようなクラスメートや教師の動きによって自分の発言が受け入れられやすくなっているとE児自身が感じることで、彼女の発言を促し、また、彼女の発言をクラスで共有することで学びが深まるという循環をつくり出していると言えるだろう。